
オルタナティブ

黒猫 にゃんにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オルタナティブ

【Nコード】

N5846N

【作者名】

黒猫 にゃんにゃん

【あらすじ】

わたしと瓜二つの少女。その少女を大切に思っていた少年。彼はわたしに彼女を重ねるのだった。わたしは彼女の代わりにになることができるのだろうか？

オルタナティブ
少女の代理人になったわたし。少年の夢の代替案になったわたし。

オルタナティブ
二者択一の選択肢のひとつに過ぎないわたしは彼のためになんができるのだろうか。

とある女の子の初恋のお話です。

少年と少女

ぼくが病室に入ると彼女は窓の方を見ていた。それは窓の向こう側の景色を見ていたのか、窓ガラスを見ていたのかはぼくの位置からではわからない。来客用の椅子をひろげて腰をおろし、読みかけの文庫本を取り出した。紙のこすれる音だけが聞こえる。閉塞された空間。なにもない部屋。ぼくら以外は誰もいない部屋。

「夢をみたの」

唐突に彼女が言った。脈略がないのは彼女の特徴でもある。

「満開の桜。青い空をおおってしまうほどの、目をおおってしまうたくなるくらいの満開の桜。あなたと二人で桜の木の下にいる夢」
「それはきつと正夢だよ。きみは病気が治ってぼくと桜を見に行くんだ」

「でもそこにわたしはいなかったの」

「……」

相変わらず意味不明なことを言う。

「そこにいたのはわたしではない。わたしではない誰か。わたしの知らない誰か。誰も知らないわたし」

「それはなにかの比喩表現かい？」

「人間って平等じゃないのよね」

突然話題は変わる。いつものこと。

「きみはみんな平等であればいいと思っっているの？」

「みんながそれを望んでいるわ」

そのみんなにはきみも含まれているのだろうか。

「ひとつだけみんなが平等になれる方法があるよ」

そのときはじめて彼女はぼくの方を向いた。ぼくは彼女から視線をはずす。

「みんな殺せばいいのさ。死はみんなに平等だろ？」

「そんなの……」

どうやら彼女の期待に添った解答はできなかつたらしい。かまわずぼくは続ける。

「どんな数字だって零をかければ等号で結ぶことができる」

「あなたはみんな死んじゃえばいいと思っっているの？」

「そんなことはないよ、ぼくはみんな平等であるべきだとは考えていないからね」

平等は存在しない。それは存在できなかつたのではなく存在する必要がなかったからなのだ。

「たとえば幸せって言葉があるだろ？あれは相対的なものであつて絶対的なものではない」

不幸が存在するから、幸福は存在する。

表があるから裏がある。裏があれば必ず表がある。

不幸な他者が存在するから、幸福を知覚することができる。

幸福に自己完結は存在しない。

平等な世界に幸福はありえない。

「いま、あなたは幸せ？」

彼女は問う。

ぼくは答える。

「ああ、幸せさ」

こんなにも不幸な人間が目の前にいるのだから。

こんなにも他者の不幸を喜ぶ者がいるのだから。

「じゃあ、なんでそんなにも悲しい顔をしているの？」

彼女は問う。

ぼくは答える。

「それは……」

彼女はぼくの言葉をさえぎつた。そして悲しい顔で笑ってみせた。その二週間後、彼女は死んだ。

みゆきちゃん

地面との摩擦でわたしのお気に入りのスニーカーはどんどん熱を帯びてゆくのがわかる。地面を蹴るように走る。アウト・イン・アウトで本屋の角を曲がったところでわたしは後方を確認する。どうやら追いかけてははいないようだ。

ふーと息を吐く。真夏だったらわたしは汗だくになっていただろう。しかし今は暦上冬であり、もうすぐ桜が咲く季節でもある。こんな時期に体中の汗腺から体液を垂れ流す人間はそうはいないだろう。

風が吹けば気持ちがいいのにと考えながら腰に手をあて仁王立ちをしていると、誰かが声をかけてきた。振り返るとそこには親友の友人Aがいた。

「だれが友人Aだ」

「大変だ」

ふと先ほどの出来事を思い出す。風が気持ちよくて忘れていた。

「なにが？」

「告白された！」

「へー。で、なんでそれが全身から汗が噴出す理由になるわけ？」

「すごいやつに声かけられたんだよ！」

彼女は少し考えるしぐさをした。どうやら該当者を検索しているようだ。

「同じクラスの人？」

「違う！」

「じゃあ、先輩か、あのサッカー部の」

「違うってば！」

わたしは顔を左右に振った。勢いがよすぎて汗がまきちる。彼女はハンカチを取り出し、顔を拭く。

「おっさんだったの！」

彼女は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに真顔に戻った。

「それって道を聞こうとしていたとかじゃないの？」

そこでわたしは顔を左右に振ることを止めた。言われてみればそうだったのかもしれない。しかしなにかひっかかる。さすがのわたしでも道を尋ねられたら案内をするぐらいの良心は持ち合わせているつもりだ。なにか普通ではない雰囲気を感じた。

そう、あの人は幽霊でも見たかのような顔をしていた。そしてこう言ったのだ。

ミユキ

もちろんわたしの名前はミユキではない。ミユキという名前の少女をわたしは知らない。

それからおっさんのことはすっかり忘れていた。わたしの記憶力が乏しいわけではない。単に覚えておくほど重要な出来事でもなかっただけだ。しかし完全に忘却の彼方に追いやっていたわけでもない。だからおっさんに声をかけられたときすぐに思い出すことができた。

「やあ」

今にも消え入りそうなか細い声だった。ここが図書館なので気を使っているのか、もともと気が弱いのか。どちらかはわからなかったが、そのどちらでもある気がした。

「どこかで話をしないか？」

「申し訳ないですけど、母に知らない人にはついていけないよう申しつけられておりますので」

「ケーキでもおごるよ」

わたしたちは近くの喫茶店に入った。

けっしてケーキが食べたくておっさんについてきたわけではない。わたしの行き先に喫茶店があっただけである。

落ち着いた感じのお店だった。茶色を基調としていて、テーブルも椅子も木製である。わたしたちのほかには二人組みの女のひと、スーツを着たサラリーマン風の男のひとだけしかいない。おっさんが迷わず窓側のテーブルに向かったので、わたしもそれに続く。

席につくと女の人がわたしたちのところへ来た。白いシャツにジーンズ。黒いエプロンをしている。どうやら店員さんのようだ。

わたしはメニューを見ようとテーブルを見渡したがそのようなものはなかった。

「モカと、あとモンブラン一つください」

大人はメニューを見ずに注文するらしい。

店内には音楽が流れている。ピアノであることくらいしかわからない。

おっさんは店員さんがカウンターに戻るのを待つて話しはじめた。「君に声をかけたのはね」

どうやらわたしにこえをかけた経緯を話しているようだったがわたしの興味は話の途中で運ばれてきたモンブランにうつってしまった。しかし完全に無視を決め込んでいたわけではない。モンブランの解体作業に忙しくしながらも聞いていた。わたしが人の話をまったく聞かない女ではないということを強く銘記していただきたい。話の途中でモンブランがやってきたのだ。けっしてわたしのせいではない。

おっさんの話を要約するところだ。

ミュキちゃんという女の子がわたしと瓜二つである。しかし病気で死んでしまった。そしてわたしを見つけて思わず声をかけてしまった。

どうにも胡散臭い話である。

「信じられるわけないよね」

おっさんは困った顔をする。あたりまえである。そんな話を信じ

るバカはいない。

「ミュキちゃんとなたしってそんなに似ているの？」

「ああ、似ているよ、それこそ生き返ったのかと思った」

でも彼女は人の話を聞かずに全力疾走で逃げたりはしなかったけれど。おっさんはコーヒーに口をつけながら困ったように言った。

「つまり似ているのは見た目だけだ」と

「そういうことになるね」

わたしは端によせておいた栗にフォークを刺しおっさんにつきつけた。

「で、おっさんはなにが目的なわけ？」

「おっさんって僕のことかい？」

まだ二十代なのだけど。おっさんは不満そうにこぼしていたが、わたしからしてみれば二十代はおっさんである。

「目的なんてそんなものはないさ」

コーヒーに口をつける。表情は見えない。

「モンブランも食べさせてもらったし、わたしを好きにする権利をおっさんにあげましょう」

おっさんは心底困ったような顔をして、なにか悩んでいた。それはなにか目的を考えているというよりか、目的は最初から決まっただけで、それを言うべきか悩んでいるようだった。そして一冊の手帳を取り出した。

「なにこの手帳」

手渡された手帳は随分とかわいらしいものだった。いまどき中学生でも恥ずかしくて使うことがなさそうなデザインである。おっさんにこのような趣味はないだろうから、これはおそらくミュキちゃんのものだろう。

手帳を開くと、そこにはかわいらしい字が並んでいた。どうやらやりたいこと、したいことなどが書かれているようだ。

「肉まんが食べたい。ステーキが食べたい。モンブランが食べたい。」

「

だからわたしにモンブランを食べさせたのか。

「そこじゃない、もっと後だ」

そこには一枚の写真がはさまっていた。桜だ。満開の桜。

「これは？」

「京都の桜だ、学生るとき僕が撮った」

写真には誰も写ってはいない。ただの桜の木。ただの満開の桜。

病気で外出できないミュキちゃんのために撮ったのか。頼まれて撮ったのか。良かれと思って撮ったのか。悪気はなかったのだろうか。この写真は彼女にとってどのような意味を持っていたのか。

おっさんは手帳に写真を再びはさんだ。

「彼女と約束したんだ、この桜を見に行くって」

しかしその約束を果たす前に彼女は亡くなった。だからわたしにミュキちゃんのかわりになれとでもいうのか。ミュキちゃんのかわりに約束を果たしてくれと。

約束を反故にしたのは彼のほうだったのか、それとも彼女のほうだったのか。守れないことがわかっていても約束をした彼らはいったいどんな気持ちだったのだろう。希望に満ち溢れていたのか、それとも絶望から目を背けたかったのか。わたしにはわからない。しかし彼が贖罪を望んでいることはわかる。おっさんがわたしと約束の場所に行くことでミュキちゃんへの免罪符になるかもしれない。わたしになら彼の想いを、彼女の願いを叶えてあげられるかもしれない。夢を代わりに叶えてあげられる。

約束の桜

わたしとおっさんは京都に向かった。新幹線の中でお弁当を三個も食べたのは朝ごはんを食べ損なったからである。けっしてわたしが大食らいなわけではない。

平日だというのにこのこみようである。わたしの生まれ育った街とは別の国に来たようだ。

そこからバスに乗り換える。今は桜の季節なので、さぞかし満開の桜がわたしたちを出迎えてくれるのだろう。バスが止まると、わたしはバスのステップを飛び降りた。

勝手に行くな、おっさんの声もどこかうれしそうである。それはそうだ。だって長年待ち望んでいた約束を果たすことができるのだから。

南禅寺。ここだ。わたしは走り出す。

桜がきれいだ。こんなにもきれいな桜たちをわたしは見たことがない。空気も澄んでいる気がする。さらに速度をあげる。わたしは走る、約束の桜の木へと。

写真から見るにこのへんのはずだ。わたしはまわりを見渡す。しかしそうのようなものはなかった。もう少し向こうなのかもしれない。

そんなことを考えながら、ふと足元を見た。

「そんな・・・」

これをおっさんには見せてはいけない。そう思った。わたしは来た道をひきかえそうと振り返るとそこにはもう彼がいた。

風が吹く。桜の花びらが宙に舞う。こんなにもたくさんの桜。桜。桜。しかし約束の桜はなかった。

おっさんは呆然とその場に立ち尽くしていたけれど、しばらくして口を開いた。

「きつと彼女は僕が自分以外の誰かとここに来るのが嫌だったんだ

るうね」

そんなことない、ということとは簡単だ。しかしミュキちゃんの気持ちはわからない。わたしはミュキちゃんではない。ただ外見が似ているだけだ。気持ちなんてわかるわけがない。

もう花を咲かすことのない約束の木。約束を果たすことのできない桜の木。いやミュキちゃんがいなくなった時点で約束は果たせないのか。

わたしは顔を伏せた。いまの顔をおっさんには見られたくない。こんなひどい顔見せられない。

わたしは泣きながら、笑みをこぼしていた。わたしはひどい女だ。おっさんがこんなに悲しんでいるのに。

わたしは安堵していた。どうしようもないくらいに安堵していた。約束を果たせなかったことに安堵している自分がいた。そうか嫉妬していたのか。死んでもなお、おっさんの心に居続けるミュキちゃんに。

ミュキちゃんなんていなくなってしまうばい。

ミュキちゃんがいなくなれば彼はわたしをみてくれる。

ミュキちゃんがいなければ彼はわたしをみてくれない。

矛盾。ミュキちゃんがいなければわたしたちが出会うことはなかった。

いま、彼はなにを考えているのだろう。なにを思っているのだろう。

幸せではないだろう。ならば不幸なのだろうか。

いま、わたしはなにを考えているのだろう。なにを思っているのだろう。

不幸だとは思わない。ならば幸せなのだろうか。

不幸じゃないから幸福だなんて、そんな二者択一的な幸福論わたしは知らない。知りたくもない。一方が選択できなくなつて、もう一方を選択せざるをえないような、そんな二者択一間違っている。

ミュキちゃんは一般解でわたしは特殊解だった。いや特異解か。ど

つちがどつちだか忘れてしまった。どちらにしても選択せざるをえなかったゴミ解がわたしだった。

わたしでは代わりになることができなかった。単純なことだった。ミュキちゃんが死んで物語は終わり。どんな登場人物もミュキちゃんの代わりにはなりえない。

ミュキちゃんがいらないから、代わりにわたし。そんな代替案間違っていた。そんな誰かが誰かの代わりになるなんて間違っていた。わたしはなんでここにきたのだろう。

ミュキちゃんの免罪符？ 違う。わたしはこの人の力になりたかった。この人の生きる希望になりたかった。

「来年も来よう」

「え？」

「再来年もその次の年も。桜が咲く季節に何度でもここに来よう」

それはミュキちゃんの気持ちをなにも考えていないことばだった。

「わたしと約束しよう」

そこに約束の木はない。ありもしない桜の木の下で約束をかわすなんてバカな話だ。

おっさんはわたしを見て微笑んだ。

「ああ、約束だ」

この約束にはどれほどの意味があるのだろう。守れないことがわかっていても約束をするのはどんな気持ちなのだろう。かつて同じ約束を交わした彼らの気持ちが少しだけわかった気がした。

笑顔

私たちはいま、閑静な住宅街、大きなお家の前にいる。ここはミユキちゃんのお家だ。いまはご両親だけが住んでいる。

「なんか、緊張するね」

軽く吐きそうである。こんなことなら朝ごはん三杯も食べるんじゃないかった。服装ももっとちゃんとしたほうがよかったのかな。和服着てくればよかった。でもいまの体じゃ無理か。

私の心配をよそにおっさんは勝手にインターホンを押していた。明るい声が聞こえる。人の良さが伺える。さすがミユキちゃんのお母さん。

玄関を入るとご両親が出迎えてくれた。驚きの表情。そんなにわたしは似ているのか。長い沈黙をやぶったのはおっさんだった。

「まあ、玄関でお話するのもあれなんで」

お前の家じゃないだろ。えらそうにすんな。

リビングに案内された。きれい。ちゃんと掃除している。あたりまえか。

「いやあ、本当にびっくりしたよ。話には聞いていたけれど」

私はあなたのびっくりした顔を写真に収めて差し上げたいくらいの気持ちでしたよ、お父さん。

「そうね、結婚したってはなしを聞いた時には自分の娘のように喜びましたよ」

泣きそうな顔で言わないでよ、お母さん。

「今日のご報告と思いまして挨拶に参りました」

「使い慣れない言葉使うなよ」

「じゃあ」

私は咳払いをしてのどの調子を整えた

「赤ちゃんできちゃいました!」

驚きの表情。でもどこか嬉しそう。

そこからは大変だった。なぜかお父さん大泣き。つられておっさん号泣。すごい顔で泣くなつて思っていたけれど一番ひどい顔をしていたのは私だった。別に嬉しくて泣いたわけじゃない。おっさんたちがあまりにすごい顔で泣くから笑い泣きしたんだ。私が泣き止むころにはみんな笑顔だった。

帰り道。行きはタクシーだったが、なぜか帰りは歩いた。そういう気分だった。

私たちは昔の話をしていた。おっさんとはいろいろな場所へ行った。学生時代はおっさんとの思い出ばかりだ。それほど私たちは同じ時間を過ごしたのだ。

駅に着く。もう着いてしまった。あまりにはやいお別れ。

「家まで送っていいかうか？」

「このあと旦那とご飯食べる約束しているの」

「そっか、じゃあここで」

「うん、またね」

私たちはなぜかそこにとどまっていた。別れを惜しんでいるのだろうか。いつでも会えるのに。好きなときに会うことができるのに。

「いま、幸せ？」

彼が問う。

私は答える。

「幸せだよー！」

これは二者択一なんかじゃない。一方の選択肢が選べなくて、選ばざるをえなかった選択肢じゃない。

猛烈に。

単純に。

どうしようもなく、わたしは幸せなのだ。

「そっか」

彼は歩き出した。私は見えなくなるまで見送ることにした。そうしなければいけないような気がした。

切符を買って、改札を通る。

誰もいない片田舎の駅のホーム。

ベンチに腰をかける。

電車はまだ来ない。

静かな時間。

夕暮れ。

沈まんとする太陽。

薄く見える月。

明かりを失う空。

灯かりを得る空。

澄んだ空気。

曇った背景。

頬をつたう涙。

電車がホームへとやってくる。

静かに扉が開く。

わたしは立ち上がった。

笑顔（後書き）

ありがとうございました。

いかがだったでしょう？

この作品はおっさんと私があたかも結ばれたとミスリードさせてみたく書いてみました。

最後私はどうなったのでしょうか。旦那のいる家に帰るために立ち上がったのか。おっさんを追いかけるために立ち上がったのか。

そのへんは皆様のご想像にお任せしたいと思います。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5846n/>

オルタナティブ

2010年10月8日12時13分発行